

「神を見る目、素直な目」

ヨハネによる福音書 5 章 31～47 節

「多くの人が死んでいる。操業を一時停止して、排水を出さないようにしてもらいたい」。水俣病^{みなまたびょう}がすでに広がりを見せていた 1959 年、水産庁の漁業振興課長がチッソ水俣工場の工場長に申し出をします。が、工場長は言い返します。「因果関係が科学的に証明されていない。私は農薬が原因だと思う。毎日、排水を飲んでもいい」。さらに、水産庁の水質担当技官が当時の通産省（通商産業省。現・経済産業省）に排水停止を指導するよう頼んだときのこと。通産省の役人は言いました。「水産庁は工業立国という言葉を理解しないのか」。そして、関係省庁の会議で有機水銀説を否定する文書を配布したのです。有機水銀説は、当時、熊本大学が主張していた説でした。その説を小馬鹿にして、通産省の役人はこう言ったと言われていました。「熊大ごときの説など」。こうして、対策の遅れから、水俣病は多くの被害者を出すに至りました。1960 年、チッソ水俣工場が排水処理の方法を変えたことで水銀の流出量は激減しましたが、その工事費用はわずか数百万円でした。また、1969 年には国が水質保全部で水俣湾を指定したことで、対策も確定されました。けれども、それはチッソ水俣工場が汚染源たる化学物質の製造を中止して、すでに一年が経っていたときでした。そして、水俣問題に関わった通産省の官僚たちはその後、化学会社の重役や公団の理事に迎えられていったのです。1950 年代から 60 年代にかけ 熊本県の水俣湾周辺で集団発生した水俣病^{てんまつ}の顛末^{かたぐさ}で、今なお語り種^{かたぐさ}になっているやり取りです。御存じのとおり 足尾銅山の鉍毒問題と共に公害の原点と言われる出来事で、チッソ水俣工場の廃液に含まれる有機水銀が水俣湾の魚介類を汚染し、それらを食べた人々が神経を冒されて 多くの死者が出た事件でした。エゴと利権^{とら}に囚われた人間の愚かさを物語るものではないでしょうか。初めに結論ありき。自己本位のエゴの結論で、理屈は後から付けるもの、との印象が拭えませんが、そこに欠けているのは、真理に対する素直さ。すなわち、真実なものに対して自ら^{みづか}を開く、その真つすぐな有りようのように思われます。水俣問題はたしかに大きな社会的問題で、日常の私たちからは多少 距離があるようにも感じられますが、しかし、自身の心の内を虚心に見詰めるとき、見た目こそ小さいながら、同じ質の影や染みがそこにもあることに気づかされるのではないのでしょうか。私たち自身の内^{かいまみ}に垣間見る、他人事^{ひとごと}とは言い切れない歪み^{ゆが}です。実際、私たちは真つさらであることや私心のないことに遠い存在で、素直であることがことのほか苦手なように思われます。心の狭さや頑^{かたく}なさというのは社会の諸問題に現われるだけでなく、人の内面に深く潜んでいるのではないのでしょうか。

もう 50 年以上も前になるのでしょうか。「スーダラ節」という、どこか暢気^{のんき}で陽気な歌が流行^{はや}りました。あの 植木^{うえき}等の歌です。その「スーダラ節」は、リフレインの部分でこう繰り返します。「分

かっちゃいるけど、止められない」。歌はある種、開き直りの気楽さを面白おかしく詠ったものですが、リフレーンのこの言葉は考えようによっては、本当は重く深刻な言葉とも言えるのではないのでしょうか。「こうこう こうしなきゃいけないのは分かっちゃいるけど、そうできない」「こうこう こんな自分にならなきゃいけないのは分かっちゃいるけど、そうなれない」。真面目に考えると、そんな忸怩たる思いを感じさせもします。

人間にとって大切なことというのは、本質的には、概して単純でシンプルなもののようにも思われます。例えば、愛すること。誰にとっても大事なことでしょう。けれども 考えてみれば、その本質はやはり、「自分を愛するように あなたの隣り人を愛せよ」(マルコ 12:31。口語訳)と言われたイエス・キリストの その言葉に帰するのではないか。あるいは、正直であること。これもまた大切なことですが、しかしこれも、本質的には偽りがなく、誤魔化(ごまか)しがないことではないかと、そう思われます。ところが、なのです。であるにもかかわらず、ここで問題が露わになります。単純でシンプルだからといって、それがそのまま だから簡単、ということにはならないという事実です。それどころか、単純でシンプルになればなるほど、事は逆に、容易でなくなる。さらにも増して難しくなる。それが私たちの現実ではないのでしょうか。「分かっちゃいるけど、止められない」。「スーダラ節」のリフレーンは、私たちの現実を見事に言い当てているように思います。そして、そうしたことのひとつとしてあるのが 冒頭で触れた「素直であること」のようにも思われるのですが、いかがでしょうか。私たちははたして、地のまま 心から素直であることが容易にできるのでしょうか。

ちなみに、もうかなり前になりますが、ある教会で一人の男の方のバプテスマ式に立ち会ったことがあります。公立の大きな病院で精神科の医師として働いておられた方でした。その後たまたま、礼拝の後、この方と駅まで御一緒する機会がありました。その折、歩きながら伺った言葉の幾つかが今でも心に残っています。精神科のお医者さんですから、人の心のことは人一倍 よく知っておられます。そんな御自身がバプテスマを受けられたのは、本当に確かなものは人間の内側にはない、と改めて知ったからだそうです。そして、生きる支柱のようなものを求めて教会に来るようになり、聖書の中にそれを見出したのでバプテスマを受けたんです、とおっしゃっておられました。そんな語らいのなかでした。世の中も教会も、素直になれたら、かなりの問題は解決するんじゃないかとね、と何の気なしに私が呟いたところ、こんな言葉が返ってきたのです。「そうなんです。日常の人間関係から社会での出来事まで、もう少し素直になれたらずっと良くなるんですけどね。ただ、それができない。この私もですよ。心というのはなかなか頑(かたく)なで、こうすりゃいいと思っていても、そうなれない自分が頑(がん)としてるんです。良いことや正しいことにそのまま素直に向かえない自分がいましてね。本当は、そこに大問題がある。私がバプテスマを受けた理由の一つは、そんな自分を崩すものを聖書の中に見つけたからでもあるんです。多少なりとも自分を素直にさせてくれるお方を聖書の中に見出したからです」。その方の証しそのものでした。

もちろん、素直であるとは、正しかろうが間違っていようが、何でもそのままよしとして受け入れることではないでしょう。そうではなく、それは、事実を事実として見ること。好き嫌いではなく、事柄を事柄そのものとして見て、それが正しく良いものであるなら、たとえ気に入らないことであっても真つすぐに受け止め、それを受け入れることだろうと思います。そもそも、素直であるとは一冒頭でも若干触れましたが一真理や真実に対してのものであり、偽りや誤魔化しに対してはむしろ、それらを鋭く見て取って盲従しないことこそがその証し^{あか}と言えるでしょう。イエス・キリストが言われるのもそうした類いの素直さであって、今回もそれが大前提です。その意味では、聖書の言う信仰とは、一つ一つの言い方として一（善意と信頼に基づく）素直な関係を 主イエスとの間に持つこと、と言えるかもしれません。

今月の聖書の箇所は、前回6月のそれからの、すなわち5章19節以下からの続きです。19節は、「そこで、イエスは彼らに言われた」と記しています。ここで言う「彼ら」とは、ユダヤの指導者たちのことです。イエス・キリストが安息日^{あんそくび}に足の不自由な男を癒やしたのを安息日の規定に反すると言って咎め^{とが}、それを口実に 主イエスを亡き者にしようと殺意を強めていた者たちでした。その彼らに向かって、主イエスが答えて言われた。今月は、その返答の後半部分になります。田舎村^{いなかむら}のナザレの出の、しかも大工の息子^{むすこごと}如きがとんでもないことを言って、自分たちを批判している！ユダヤの指導者たちはそのように危機感をつのらせ、主イエスを葬ろうと 画策を始めていました。状況はしだいに、緊迫の度を増しつつあります。殺意^{いだ}を抱いたユダヤ人たちは、イエス・キリストに迫ります。あれやこれや、それほど大それたことを言うからには、その根拠を示せ！主イエスの言葉はこれに答えて語られたものでした。

イエス・キリストは「もし、わたしが自分自身について証し^{あか}をするなら、その証しは真実ではない」(31)と語って、本日の箇所を切り出されます。それは、御自身の言葉が真実であることを説き明かすと同時に、その真実がなぜ信じられないのか、どうしたら信じられるのかを教え諭^{おし}すものでもありました。「もし、わたしが自分自身について証しをするなら、その証しは真実ではない」。これは、私たちの常識からしても 容易に理解できます。自分に嘘^{うそ}はない、自分は真実だ、と自分で自分のことを証言しても、どれほどの人が信じるでしょうか。ユダヤ教の教師らもまた、自己弁護の証言は信じるに値しない、と強調していました。それは、私たち人間の本质を踏まえたものでした。私たちは、いかに自分を律しても、自分可愛^{かわい}さから自ら^{みづか}に甘くなり、保身の思いについ 心を許してしまうからです。加えて、事が真実なら、当人の言葉以外にも何らかの証言や証拠が存在し、かつ そこから何事かが起こるもの、そこになにがしかのしるしが見られるものであって、それらが無いところでは その言葉は真実とは言いがたい、というわけです。主イエスの言葉は、真理をめぐるこうした背景を踏まえたものでもありました。

そこで、イエス・キリストは御自身に対する証言を持ち出されます。主イエスは今回の箇所で、その証言を、すなわち「証し^{あか}」を列挙しておられます。「バプテスマのヨハネ」と「聖書」と「モーセ」

の証しです。

まず、「バプテスマのヨハネ」について、イエス・キリストは33節でこのように言われます。「あなたたちはヨハネのもとへ人を送ったが、彼は真理について証しをした」。これは、1章に「エルサレムのユダヤ人たちが、祭司やレビ人^{びと}たちをヨハネのもとへ遣わして、『あなたは、どなたですか』と質問させた」(1:19)と記されている、その時のことです。けれども、これに続けて、主イエスはこう言われるのでした。35節、「あなたたちは、しばらくの間その光のもとで喜び楽しもうとした」。つまり、ユダヤ人たちは道を真剣に求めることに欠けていた、と。なぜなら、自分たちが危うい立場にならない間はしばし、余興のネタのようにしてヨハネの話題を楽しんだが、しかし、ひとたび自分たちが批判的にされて扱いにくくなると、一転、ヨハネを迫害して捕らえたからです。35節の前半を見ると、「ヨハネは、燃えて輝くともし火であった」と、(未完) 過去形 ($\eta\nu < \epsilon\iota\mu\iota$) で語られています。このとき、ヨハネはすでに処刑されていたのでしょう。バプテスマのヨハネは「ともし火」でした。イエス・キリストに至る道の足もとを照らし、そうすることで真^{まこと}の光である主イエスを指し示した^{あか}灯りでした。その「ともし火」は、イエス・キリストを指し示すまでの間、燃えて輝きました。そして、自分を燃やし尽くし、務めを全うしたのでした。それなのに、ユダヤの指導者たちは、その言葉に耳を傾けませんでした。話のネタとしては楽しんだものの、ヨハネが語ったそのメッセージの中身には耳を貸さなかったのです。

主イエスは 続いて、「聖書」を持ち出されます。当時 聖書と言うとき、それは現在の旧約聖書を指しますが、イエス・キリストはその聖書を指して、次のように語られます。「あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが、聖書はわたしについて証しをするものだ」(39)。ユダヤ人にとって、聖書は何より大切なものでした。そのリーダーたちは、旧約聖書に記された神の戒め「律法」を熱心に学んでいました。しかし、何事も本来の主旨から外れると、いのちが失われていきます。熱心な学びが、主イエスの言われたように、いわば「研究」に傾いていきました。戒めを分類し、それらを細かに規定して、詳細な体系に整理する、などなど。そして、そこにあつたはずのいのちが希薄になる、といったぐあいです。そもそも、旧約聖書は、歴史に働かれる神がイスラエルの民を守り導き、苦闘の出来事を通して育み育てられた、その恵みの記録と言えるでしょう。そのようにして、いつの日か、神の御旨^{みむね}をその身に負い、真^{まこと}のいのちの在り^あか^かを身をもって示す救い主が来られることを告げる書。旧約聖書とはそもそも そういう書のはずですから、思い込みや決めつけを排し、心を真つすぐにして読むなら、それが主イエスを指し示すことは分かるはずでした。イエス・キリストに向かい、イエス・キリストへと導いて、展開を遂げる。「聖書はわたしについて証しをするものだ」と主イエスが言われたのは、そういう意味ではないのでしょうか。その主イエスを抜きに聖書を学んでも、見つかるものも見つからない、ということなのでしょう。どうしてなのでしょう。ここでもまた、彼らユダヤ人たちは、自分たちが決めてかかっていたその見方や考えから出ようとしなかった。そこから一歩 外に踏み出し、真つさらな素直さで事を見直すことをしようとしなかった、ということではないのでしょうか。今ある自分

たちの考えや利害を守ることに心を奪われていたからです。そのようにして 40 節、彼らは「命を得るためにわたしのところへ来ようとしない」と、主イエスにそう言われたのでした。

そして、あと一つの「モーセ」に関しても同じでした。モーセは旧約聖書の象徴として引用されますが、とりわけ神の律法を授かった者として、また神の律法を教えた者として引き合いに出されます。なかでも ^{じっかい}十戒は「モーセの十戒」とも呼ばれ、旧約の律法全体の中心に置かれています。ユダヤの人々はこの十戒を最大の戒めとして モーセの律法に敬意を払い、それらを大切にしていました。そんな彼らですから、彼らが神の前に立たされたとき、他の人はともかく モーセだけは自分たちを弁護してくれる、と そう信じていたのです。ところが、イエス・キリストの言葉はどうでしょうか。45 節、「わたしが父にあなたたちを訴えるなどと、考えてはならない。あなたたちを訴えるのは、あなたたちが頼りにしているモーセなのだ」と、そう言われます。これはユダヤ人にとって、文字どおり ^{せいてん}青天の ^{へきれき}霹靂。予想だにできなかったにちがいありません。がしかし、十戒に始まる律法を、彼らは人を裁くための道具にしてしまっていました。他人を裁き、その一方で、自分の評価を上げるための道具にしていたのです。人の足を引っ張り、自分をよく見せる。十戒はそもそも、見た目の表面的な言い回しの裏に 神の真意が秘められた戒めではないでしょうか。それはたしかに、何々してはならない、という禁止の言い回しが目立ちます。けれども、その底に流れる、その裏に秘められた神の真意が そこにはある。それは、人を神とせず、また自分をも神とせず、神をこそ 神とするように、ということ。そのようにして、私たちが死に至らないでいのちを得るように、ということ。そして、隣り人のいのちもまた 大切にするように、ということ。そうであるなら、それはまさに イエス・キリストの心に通じるものであり、主イエスを指し示して、そこに導くものと言えはしないでしょうか。私たちに神を示し、私たちがいのちに生かすためにいらしてくださいました方。それが、イエス・キリストだからです。「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思っはならない。廃止するためではなく、完成するためである」(マタイ 5:17) との (主イエス御自身の) 言葉も、これに通じるものと言えるでしょう。律法の戒めが意図した本来の意味を完成させるため。そして、その中心は、神を愛し 人を愛すること。なのに、そのことを見失ってしまったあなたたちは、そもそもそのことを教えた当のモーセに訴えられるであろう。主イエスはそう言われたのでした。

初めにも申しましたが、私たちは実際、真っさらであることや私心のないことに遠い存在で、素直であることがことのほか苦手なようです。決めつけて見ることや自分中心に考えることが得意で、^{かたく}頑なさを克服するのは容易ではありません。そのようにして、思い込んだが百年目。見えてる、分かっている、と独りで思い込んで、そんな自分からなかなか出られない。しかも、自身の足りなさが分かっている、それをさらに取り繕う私たちがいたりもして……。なんとも厄介なものではないでしょうか。ドイツの劇作家にベルトルト・ブレヒトという人がいますが、そのブレヒトが、天文学者のあのガリレオ・ガリレイの生涯を描いた戯曲の中でガリレイにこう言わせているのが印象的です。「真理を知らない者はただの馬鹿者である。だが、真理を知っていながら、それを虚偽

という者は犯罪人だ」。いずれにせよ、そこに欠けているのは、正しいことに対する素直さ、すなわち真理に対する素直さであり、真実なものに対して自らを開く素直さではないでしょうか。そしてそれは、イエス・キリストが私たちにまずもって求めておられることのように思われます。十字架につけられる前、時の総督のピラトから尋問を受けられたとき、主イエスは何と言って それに答えられたか、覚えておられるでしょうか。「わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く」(ヨハネ 18:37)。真理に心を開く素直さ。それはやはり、イエス・キリストに向かう者にとって大切なもののようです。

こうして、ユダヤの指導者たちは 神が送ってくださったいのちの主を 蔑ろにし、今いるそのところから動こうとはしませんでした。彼らも、聖書を読んではいました。人一倍そうしていたはずですが、心を狭くし、固くしてそうしていた。自身のあれこれを脇にやって まず神に聴く、というのではなく、自分たちの思いや計算がそこにしぶとく居座っていたのでしょうか。彼らのそうした心の内を見抜かれたからではないでしょうか。主イエスは、ですから、42 節で次のように言っておられます。「あなたたちの内には 神への愛がない」

加えて、ユダヤでは当時、メシアを自称する詐欺師紛いの人間も次々と現われていました。その数は少なく見積もっても 64 人を下らない、と 歴史家は語っています。彼らは気前のいい神を説き、ユダヤ王国の復興やこの世的な繁栄・成功を約束しました。目に見える幸せを謳う、いわゆる御利益的な幸福宗教です。そして、そんなメシアを、人々は少なからず歓迎したのです。安易な安っぽいものであっても、自分たちの願望に合う約束をしてくれたからです。今日の新興宗教の教祖らとよく似ているのではないのでしょうか。真理を愛するのではなく、自分の願いを愛し、それを叶えてくれる人を歓迎する。そんな人々にとっては、十字架上に死の姿を晒す冴えない救い主などやはり、いつの時も人気がないにちがひありません。

このように、一方では、聖書の知識を誇示し、見た目の信心深さで己が名を高める。また一方では、メシアを自称し、人々の人気取りに腐心する。そこにいたのは、そのような人たちでした。どちらも、神を愛するのではなく、「人からの誉れ」(41) を求めたと言えるでしょう。そんな彼らを指して、イエス・キリストは言われたのです。43 節、44 節、「もし、ほかの人が自分の名によって来れば、あなたたちは受け入れる。互いに相手からの誉れは受けるのに、唯一の神からの誉れを求めようとしないあなたたちには、どうして信じることができようか」。すなわち、人の誉れを求め、自分の誉れを求めるとき、私たちにどうして神のことが分かるか、と。そして、私たちがまた しっかり。人の誉れを求め、自分の誉れを求めるとき、私たちにまた 神は見えず、神のことは分からないのではないのでしょうか。

けれども、見える人には見える、分かる人には分かるのでしょうか。神の御姿が心の目に映り、その思いが心の内に響くようです。だからこそ、時代を超え国を超えて 信仰が与えられ、教会が建てられてきたのではないのでしょうか。そこにあったのは、言ってみれば ただ一つのことのように思わ

れます。事実素直であった、真理に素直であった、というその一事です。

ある牧師が、洗礼を受ける決心をされた御夫妻のことを記しておられました。心に期するものがあって、家族全員でその教会の礼拝に出席されていたといいます。御夫君にとっては、それが初めての教会でした。しかし、奥様が後日、その牧師につくづくと こう語られたというのです。「礼拝が終わって帰るとき、夫の顔つきがそれまで見たことのないような解き放たれた明るい顔になり、その足どりまでがそれまでと違って軽やかになっているように見えました。初めて聞いた説教でそれほどまでに解き放たれている夫の姿を見て、私もまた、とてもうれしい思いにさせられました」。この言葉を聞いて、その牧師は、心を動かされ 目の潤む思いがした、と述懐されていました。キリスト教会に初めて来た。そして、説教を全身で浴びるように聞いて、イエス・キリストを知った。ふたりにとって、帰り道はもう 自分たちだけのものではなかった。主イエスと一緒に帰っていく思いがあった、と。御夫妻は手垢の付いた過去の考えや思い込みを一度 脇にやり、心の痼りを柔らかかにして、聖書の御言葉に触れられたのでしょうか。そして、素直な心をもって、全身で浴びるようにして 説教に聴き耳を立てられたのだらうと思います。おふたりはそこでイエス・キリストに出会い、その神を知ったのではないのでしょうか。

ここに至って、おふたりを信仰に導いたものは容易に想像できます。イエス・キリストの言葉とその生き様であり、心の内に与えられた信じる思いがそれです。事の信憑性を決め、私たちに「アーメン」「そのとおりです」と言わせるのは たしかに、当の本人の言葉と生き様であり、私たちの内に起こされる信じる思いではないのでしょうか。主イエスもまた、何より重要で何より確かな証しは御自身の業であり、また 信じる者の内に神が起こしてくださるその思いであると語られます。つまり、イエス・キリストの生涯の全体・生き様の全体と、私たちの内に起こされる信じる心。それらが何にも増して確かな証しである、と そう言われるのです。36 節、37 節で「しかし、わたしにはヨハネの証しにまさる証しがある。父がわたしに成し遂げるようにお与えになった業、つまり、わたしが 行っている業そのものが、父がわたしをお遣わしになったことを証ししている。また、わたしをお遣わしになった父が、わたしについて証しをしてくださる」と述べておられるとおりです。32 節でも、「わたしについて証しをなさる方は別におられる」と語っておられます。私たちがイエス・キリストを真実なお方と信じ、神の御子と告白して、そこに信頼を置いて生きるのは、突き詰めれば この二つの証しに拠るというのです。すなわち、「神を愛し、人を愛しなさい。そこにすべてが懸かっている」(マタイ 22:34~40)と言われたその言葉を身をもって生き抜かれたイエス・キリストの生涯と、そこに神の御姿を見る思いを起したもう神御自身の証しの働き。これらこそが証しの中の証しである、ということ。私たちの内には見ることのできない、主イエスの徹底した愛の内実。そこに神を見る思いを生じさせたもう、神御自身の働き。素直で柔らかな心をもってそれらに向かうとき、信じる思いがそこで与えられる、と 聖書は語っているように聞こえます。証しは確かに存在する。信じられないとするなら、それは証言の問題ではなく、それを見る目がどんなであるかということなのだ、と。

素直であるというのは間違いなく、容易なことではないでしょう。しかし、そうあることを心から願い、また心から祈り求めるとき、そうした容易でないことをも 神は育んでくださるようです。ノートルダム清心学園の前理事長で、日本カトリック学校連合会の理事長も務められた 修道女の渡辺和子さんの証しが想い起こされます。渡辺さんはすでに故人となられましたが、だいぶ以前、次のようなコラムを新聞に寄せておられました。抜粋ですが、鬼と宝石の間で揺れてきた、と それまでの御自分を振り返りながらの文章です。

「和子さんは鬼みたい」。十四、五歳の頃、級友たちからそう言われても返す言葉がないほどに、私は冷たく高慢で、しかも我の強い人間だった。幼い時から 私には、「他人よりも優れていなければならない」という思いがあった。44 歳になって私をみごもった母は、すでに3人の子があったこともあって、本当は私を産みたくなかったらしい。かくて私は、生まれた時から「生まれてきて、すみません」という負い目を持ち、生きるに値する人間でなければ申し訳ないという思いがあって、それが十代の私を“鬼”にしたのかも知れない。

18歳の頃、私の心の中には、母への憎しみが育っていた。他方、母を憎む自分をおぞましくも感じて、ある日のこと、母校のカトリック修道女に自分の悩みを訴えた。その人は聞き終えた後、「あなたは自分のことしか考えていない。お母様の身にもなってごらんなさい」と言って、“新しい人”に生まれ変わるための洗礼をすすめたのだった。よほど自分に愛想を尽かしていたのだろう。それまでは反感さえ抱いていたキリスト教に、私はすんなりと入ってしまった。1945年4月、東京が連日連夜、空襲を受けていた時のことである。「こんな私のままで死にたくない」という思いがあったのも事実である。

戦争に負けた日本で、旧軍人の家庭は経済的に苦しかった。・・・私が持ち帰る給料を必ず 仏壇に供える母。背も丸くなって小さくなった母の姿を、今はいとおしく思える私になっていた。・・・イザヤ書の中に、「わたしの目にあなたは 崇高く、貴く」（イザヤ 43：4）という、神の人間一人ひとりに対しての愛が記されている。すでに、神に愛された者、神の手の中の宝石としての自覚は私を出生時の負い目から解放し、宝石になろうという決意に導いてくれたように思う。

30歳を目前にして、私は修道院に入った。それは失恋の結果でも、父を二・二六事件で失っていたからでもなく、全くの私の自由意思によるものだった。人一倍 気性が激しい自分を知る私は、決して裏切ることも見捨てることもしないキリストを配偶者として一生を過ごしたいと願ったのだとも言える。それほどまでに、私にとって、人を許すことはむずかしかつたのだ。共同生活である修道生活も、若い時からずっと与えられてきた管理職の生活も、私にとって決して易しいものではない。私はいまだに、鬼の自分と宝石の自分の間で揺れている。

「未見の我」という言葉が好きだ（「未だ見ぬ自分」ということである）。これから先も、日々新しい自分と出会い続け、毎日を自分の一番若い日として、自分と仲良く暮らしてゆきたいと思っている。仲良くしないことには、出会うことも難しいからだ。

鬼と宝石の間で揺れている、とは面白い表現ではないでしょうか。がそれは、御本人の真情を正直に吐露されたものと思われまます。鬼とは、素直であることと反対の姿を意味しているとも言えるのではないのでしょうか。それに対し、宝石とは、自分に向けられた温かな言葉を素直に受け入れる心を表わしていると言えるでしょう。「私はいまだに、鬼の自分と宝石の自分の間で揺れている」と言われはするものの、御本人はこのとき間違いなく、鬼から一歩押し出されて、素直な宝石へと変えられ続けていた。それがどこから始まって、何によってそうされていたかと言えば、自分自身の有りようを正直に、すなわち素直に見詰めたことからであり、そのうえで、語りかけられた言葉を再び素直に受け止められたことによるのではないか。私にはそう感じられます。そして、渡辺さんはそのようにして、鬼を突き破り、鬼の自分から抜け出させてくれる道を知られたのだらうと思います。「わたしの目にあなたは 価高く、 貴い」と、そう語りかけて、自分を素直にさせてくれるお方がおられることを知られたからではないでしょうか。

イエス・キリストは、ユダヤの指導者たちの頑なさを指摘されたそのところで、同時に、次のようにも言っておられます。34 節です。「しかし、あなたたちが救われるために・・・」。主イエスの心は常に、私たちが訴えることにはではなく、私たちが救われることにこそあるからです。主イエスの祈りはこのように、頑なな者たちのためにもありました。私たち・欠けの多い者たちの希望も、ここにこそあるのではないのでしょうか。ほんの少し心を開いて、イエス・キリストのもとに一歩足を向けるとき、私たちはそこで素直にされ、主イエスの温かな温もりを感じられるようになるのではないか。そして、日々新たにそうし続けるとき、私たちは少しずつその素直さを増し加えられ、柔らかな自分に育まれていくのではないかと、そう思わされています。私たちの素直さの欠片に主が目を留めてくださるよう、とお祈りします。

〔祈り〕

慈しみに富みたもう 主なる神様。

我にしがみつき、殻に籠もることの少なくない私たちです。そんな私たちが、どうか、決めつけや思い込みから解き放ち、心の目と耳とを開いてくださいますように。御子イエス・キリストの伴いと導きのもと、私たちの心を素直で柔らかなものにしてください。聴くべきことに耳を傾け、見るべきことに目を向けられるよう、私たちの思いを真つすぐなものとしてください。そして、あなたの幸いでそこを満ちし、内なる私たちが豊かに膨らませてくださいますように。

このとき、国内外の各地で様々な闘いの中に置かれているすべての人々を、どうか、あなたが御手をもって守り支え、希望のそのところへと導いてくださいますように。あらゆる人たちがあなたを近

わたしの心に・・・

く親しく憶えることのできる時を どうぞ、早くに備えてください。

主の御名^{みな}によって願い、お祈りいたします。

アーメン